

## 「監獄のファンタジー」ステートメント

村山悟郎

私たちの社会が、コミュニケーションの連なりによって生成されるのだとしたら、それを介するメディアについて注意深く考察しなければならない。それはとくに戦後の芸術にとってのメタレベルの課題でもある。メディアとは、何かを表象するのでもなく、指し示すのでもなく、写し取ったりするのでもない。そのメディア固有の現実を自律的に構成する働きがあるだけである。私は、そのようなメディア現象論を志向しながら、現実の社会構造が孕んでいる暴力性を解脱するアプローチを試みる。

フーコーが「監獄の誕生」で綿密に分析してみせた監獄の一望監視装置（パノプティコン）は、メディア技術の発達によって、都市においても監視の権力として確立した。街には数百万台の監視カメラが設置され、私たちにはその眼差しの束を予見することはできない。市民の1人1人もまた常にカメラを携帯しており、互いを監視し合い、ときにはその姿をネットに晒すだろう。こうした現代の権力-監視体制と相互ネットワークを暴力に仕立てる観念が、メディアと現実とが対応関係で結ばれるというインデックス性なのではないか。イスラム国のメディア的バーバリズム（無作法）が機能するのをもまた、インデックス性の誤謬からであろう。本展では、このメディアにおけるインデックス性にたいして、2つの対抗的なアプローチを試みる。それが「インデックスのための虚構」と「現実を制作するメディア」である。

### “illusion for index” ～インデックスのための虚構

カメラは、現実を写し出す。その現実とは、写し出された像とその対象の現実とが1対1で対応していると思ふことである。観測と対象とを「現実のインデックス」で結ぶ作用。たとえば監視カメラの映像は、警察や裁判所によって事実を認定する証拠として採用されている。さらにその映像をコンピュータで解析してパターンを抽出し、個人をアイデンティファイする技術が開発されており、そうした技術はますます加速してゆくだろう。

レンズの眼差しを浴びながら、私たちの現実射抜かれる。そうした監視の権力にたいして、管理を受けながらも、新しい自由の問題を考えねばならないのではないか。私たちの現実そのものをカメラに差し向ける新しい態度を発明しなければならないのである。撮られることのアート。たとえば現実のインデックスとしてはたらく監視カメラの前で、虚構を演じてみせることにはそうした批評的意味がある。カメラや顔認識プログラムを欺くイリュージョンを顕現することによって、像と対象の対応関係は破られる。そこに写っているものは現実などではなく、あくまでも装置が独自のコードで表す像である。

### “media poiesis” ～現実を制作するメディア

カメラは、撮ることによって、現実を構成する。その現実とは、メディアとの一体性によって制作される私たちの生そのものだ。人はそのメディア固有の現実を立ち上げる。本展で示す、再帰的に織り込まれた画像が、新たな時空間を作り出す様子を観てほしい。これがメディア現象論を表現している（メディアにとってインデックス性とは人の認識論的な性向の1つでしかない。）絵や文字、言語といった古来のメディアが人を人間たらしめたように、映像や写真そしてネットは私たちを次ぎなる人間にするだろう。しかしそれは新たなメディア様式が用意されることによって直ちにもたらされるものではない。メディアを意味として扱うのではなく、思考形態や経験として肉化するために、絶え間ない持続のなかで、メディアを介した新たなパターンをみずから創造しなければならないのである。言葉を話すように、映像を編集する。人の表情を読むように、音響から情動を聴く。そのような現実を制作するメディアが可能になるために、どんなアプローチが役立つだろうか。たとえば、映像と音響と言語の組み合わせに、自然にはありえないような特別なアレンジメント（配置関係）を創出できないか。異なるコミュニケーションのコードをメディアに読み込ませ、私たちの現実の生に織りあげよう。現実とは、写し出すものではなく、創り出すものなのだから。